

報告

土屋喬雄「石神調査ノート」と有賀喜左衛門モノグラフの比較検討

Comparison of TUTIYA Takao's "Isigami Field Notes" and ARUGA Kizaemon's Monograph

三須田 善暢*、林 雅秀**、庄司 知恵子***、高橋 正也****

MISUDA Yosinobu, HAYASHI Masahide, SHÔJI Chieko, TAKAHASHI Masaya

Keywords: Japanese Rural Sociology, Monographic Study, Isigami

日本農村社会学, モノグラフ研究, 石神村

1. はじめに——問題意識

本稿では、日本農村社会学を確立したといわれている有賀喜左衛門の記念碑的モノグラフ『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』(有賀(1939)。後に有賀(1967)に所収)と、その際に共同研究者として参加——しかしその後有賀との共同報告書作成を放棄——した労農派の経済史家・土屋喬雄の調査ノートおよびエッセイ的な報告記事・論文(土屋 1935=1937、1935)¹を比較することで見えてくるものを明らかにしたい。

周知のようにこのモノグラフでは当時岩手県旧石神村(現八幡平市石神)に存在していた名子制度が克明に調査・分析されており、有賀はこの調査をもとにして日本社会の基層構造である同族団理論を解明していった。

すでに述べたように(三須田ほか 2011)われわれがこのノートに着目した理由は、有賀のモノグラフにはあまり記載のなかった大家齋藤家による漆器生産のデータが、未公開の土屋ノートに記されていないだろうか、それを踏まえて有賀のモノグラフを再検討できないだろうかということからであった²。そうした観点で翻刻・調査を進めていった過程で、弁護士布施辰治による土屋の石神調査への批判と土屋による反批判(布施 1935a、1935b)、さらにはそれをめぐっての往復書簡も存在することを見出した(吉川 2010)。こうした素材を踏まえて、われわれは、土屋ノートと有賀モノグラフとの比較の分析、布施をまじえての論争の内容と含意——それは日本農村社会学の成立を考察するにあたっての示唆を含む——について、日本村落研究学会大会において報告をおこなったのである(三須田ほか 2014)。

この報告をもとに、本稿では、まず土屋ノートおよび報告論文を有賀モノグラフと対比させることから見えてくる相違点・類似点を述べる。さらに、土屋が共同の調査を放棄した理由、エッセイ的論文でよしとした理由、土屋の問題意識のなかで漆器業等のデータはどういう位置を占めるものだったのかを探り、そうした作業のなかからの示唆を引き出したい。布施をまじえた論争の内容と含意につ

いては別稿に譲ることにする。

なおこのノートの詳細についてはノート翻刻(1)の解説(三須田ほか 2011)を参照されたい。また有賀の同族団理論等についての概説も省くため既述のノート翻刻解説を参照されたい(三須田ほか 2011、庄司ほか 2011、林ほか 2012、高橋ほか 2012、三須田ほか 2013)。ただし、全体の概要については既述のものを補足し、次章で再掲しておく。

2. 土屋ノートの内容と有賀モノグラフとの比較

2.1 ノートの概要と解説

まず土屋ノートは B5 版縦罫線のもの 2 冊、計約 120 葉にわたるもので、有賀と共に石神にはじめて訪れた 1935(昭和 10)年 7-8 月にかけて記載されたものである³。土屋による帝大新聞記事がその年の 9 月であるから、調査から帰ってすぐに記事をまとめたことがわかる。なおノートの 2 冊目の途中からは石神調査のあとに訪問した浄法寺、江刈についての調査が記述されている。

ノート全体の内容は次のような構成である。

【翻刻(1)】1-2 葉は齋藤家の成員構成である。2-4 葉は土地制度に関する文書のうつしである。土地移動が証文によるものか登記によるものかという違いが明治以前以後で見られる指摘などは後述するように日本資本主義論争での土屋の立場を反映していよう。くわえてこの箇所には有賀の記述と若干の違いがみられる。4-6 葉は土屋自身による報告書の章立て、6-7 葉は質問項目リストと思われる。報告書の目次、特に「第四章結論」の細目を見ると、後述するように土屋の基本的な問題関心——日本資本主義論争での「徭役労働」論争(徭役労働は封建的なものか否か)——をあらわすものとなっており、質問項目リストを見ても、名子の賃金や借家料、名子の社会的位置についての項目に土屋のそうした問題関心をみいだせよう。

7 葉裏からはノート上部に土屋自身のページ番号がつけられている。以後そのページ数を記す。1 頁からは民俗事象が記録されており、神楽などの芸能やヤネフキなどの

* 国際文化学科、** 森林総合研究所東北支所、*** 岩手県立大学社会福祉学部、**** 東北活性化研究センター

際の大家や別家と名子の相互給付関係が聞き取られている。単なる民俗事象の聞き取りではなく社会関係・相互給付関係に力点が置かれていることがわかる。有賀の記述とかさなる箇所も多く、二人が一緒に聞き取りをしたであろうことが読みとれる。8 頁からは金銭の貸借関係、耕作における牛・馬の相互給付関係や関連する事項（農作業、肥料等）が書かれている。有賀のモノグラフにはあまり記載されておらず興味深い箇所である。

【翻刻（2）】11-13 頁は、漆器生産・販売についての聞き取りが中心である。木地挽と塗り双方をおこなっているが木地は大正 7 年前はよそから購入していたこと、明治 20 年頃までが漆器業の盛んな時期でその頃までは輪島から職人を雇ったこともあったこと、明治 20 年以降は炭焼が多くなったこと、漆器販売の方法（行商や市日）などが記載されている。石神の近隣部落についての生産状況も書かれており、石神がもっとも規模が大きかったことがわかる。14-18 頁は名子や召使との関係についてである。日雇いの賃金や食事等給付状況や、大家が名子と呼ぶときの呼称や礼法、その変化、墓の状況、大家・名子の子どもの小学校での地位などが書かれている。名子の経済状況としての食料自給率（何ヵ月分の食料をまかなえるか）、大家への依存状況、病気の時の大家の対応も書かれている。それを踏まえて、名子の経営は引き合わないと考えているとの大家の言葉が記載される。この箇所は土屋（1935=1937：66）でも紹介され、名子制度が解体しつつある論拠の一つとされる。19-21 頁は副業や金融、交易などについてであり、炭焼のこと、スゴ等民具の販売価格、やってきた行商人のこと、それと関連してのハレの日の行事と食事等が書かれている。22 頁はケの日の食生活、23-24 頁も引き続いて名子・召使の食と住についての記載である。25-26 頁の前までは名子・召使の一日の生活、墓・家屋敷が図とともに記されている。この図は有賀でも（一部異なるが）再掲されている。26 頁はスケについて、28-30 頁は土地所有に関する古文書の写しである。ここでも 2-4 葉にあったように土地移動と証文の件が備考として記されている。31-33 頁は明治 9 年の耕地反別である。

【翻刻（3）】その後しばらく空白が続き、41-43 頁では牛馬の使用や部落の生業、炭焼き・北海道樺太やブラジルへの出稼ぎなど副業・兼業について記載されている。鉄道がとおった明治 20 年代以降に炭焼や出稼ぎがさかんになったことは、漆器業が衰退した裏返しのことでもあり興味深い。43-45 頁では名子になったり抜けたりするきっかけが書かれている。名子抜けした家は齋藤家では 1 軒のみで、隣接の中佐井部落では 4 軒で、それは大家の別家が破産したことによるとある。また、名子関係は必ずしも主従関係ではないとも記してあり、関連して雇い・手間は日銭払いになっていると書かれている。46-47 頁では年末年始と盆の行事・贈答物がかいてあり、47-52 頁では大きくは名子

等の農作業がかいてある。なお 48 頁では一部漆器販売のこと（他部落の零落した者を漆器販売をさせることで持ち直させたこと）、および人物の呼称について書かれている。49-52 頁では名子と作子の違い、それぞれのスケ（奉仕作業）、分益小作、山林の利用などについて記載されている。柴・稗採取とも官有地の払下げを利用して大家の山は使わない（あるいは使わせない）、とある。この点は地主の山林支配の様相が推測される箇所であるが、この程度にとどまっている。53-58 頁では大家および名子等についての婚礼や葬式の様子が詳細に書かれている。このあたりは有賀のモノグラフでも同様に記述されている。58-66 頁では召使（と名子）になる過程や、その仕事、栽培品目、休暇など、大家の名子らに対する庇護の様子が記載されている。67-71 頁では浅沢村（当時の行政村）の生産高、宗門帳、税制についてが記載されている。年貢が金納であった文書が記される。72 頁では村の制裁について記載されている。それぞれの項目に関して、一貫して名子と大家との関係に焦点があてられている。書き方を見ると、名子に聞いたのではなく、大家からの聞き取りであることがうかがえる。

【翻刻（4）】73-75 頁では名子の屋敷・屋敷地に関しての記載である。76-77 頁では、一旦石神ではなく浄法寺村（現二戸市浄法寺）・小田島家の名子・小作人についての記載がある。なぜかはわからない。名子が数千人もいて、賃金日払いであることが書いてある。78-79 頁からは内容は石神のことにもどる。産育儀礼（山伏・イタコによるトリゴ）や子ども・召使の世界、耕地・品種改良・塗物に関して記載されている。

その後ノートの 2 冊目に入る。0 頁目には最初に心覚えか漆器のことなどが書かれており 1 頁ではふたたび漆器製造（明治中頃まで大家が冬期に作っており、自家のみならず近隣部落の家々にも道具を貸して製造させていたこと、しかしその後その制度はすたれて炭焼に変わっていったこと、およびその行商）について書かれている。3-12 頁では中佐井の佐藤源八氏所蔵文書による諸物の価格についての記載が続く。そのなかに慶應 2 年の木地と塗物類の価格が掲載されているのは貴重な情報であろう。13-15 頁では農具・販売野菜・炭焼・運送・養兎等の副業に関しての聞き取りである。

これ以降、【翻刻（5）】にまたがる 43 頁までは、石神ではなく、浄法寺村の小田島家（8 月 5 日に訪問）、江刈村（現葛巻町江刈）の村木家（8 月 7 日）、岩泉町の中村家（8 月 8 日）に聞いた記述であるため割愛する。石神齋藤家同様、名子・手伝との相互給付関係や副業の様子が描かれており、隸従関係・主従関係が弱いことの論拠となっている。

2.2 比較からみえてくること

以上のノートおよび報告論文を有賀のモノグラフと対

比することからは、次のようなことがみえてくる。

(1) 聞き取りは多岐にわたるも概観的で簡素

まず、聞き取りの形式と内容について。聞き取りの対象者が明記されていないところがあり、大家に聞いたのか名子に聞いたのかを類推しなければならない箇所が多く、聞き取り日時も一部を除き記載されていない。調査の記録という点では問題があるといえよう。

ノートの記述を追っていくと、経済的なことから民俗事象、そこでの相互給付関係等と、多くの項目に飛躍しているのがわかる。そのことから、対象者の話のペースに則した聞き取りであったことがうかがえる。いわゆる非構造化あるいは半構造化インタビューをおこなっているといっていよう。

ノートの記述には有賀のモノグラフと同じ記述も多く、特に大家・名子の相互給付関係については詳細に聞いていることがわかる。また、狭義の経済面のみならず衣食住や民俗芸能その他の民俗事象も書き留めていることがわかる。有賀と同じ空間で聞き取りをおこなっていることが、記述の特定の部分からうかがえるといえよう。だがそのことは、土屋独自の聞き取り箇所が特定しづらいということでもある。

しかし、ある部分は詳細に聞いているとはいえ、全体的には有賀のモノグラフの記述よりも土屋の記述内容は簡素であり、記述の厚みが異なっていることがわかる。このように、土屋の聞き取りは多岐にわたりつつも、有賀の叙述と比較すると概観的で簡素であるといえる。

また、それぞれの項目に関して、一貫して大家と名子との関係に焦点が当てられているが、記述を見ると名子からではなく大家からの聞き取りであることがうかがえる。くわえて、名子の経済的な貧困状況等については土屋ノートではあまり踏み込んでいない。昭和恐慌をへて、出稼ぎ等に頼らねばならない当時の農村の状況では、農民生活は楽ではなかったと思われる。だが、土屋ノートでは名子の犬づかみな食料自給率はでているものの、副業・出稼ぎでの名子らの収入の具体的金額等はわからない。こうした点での踏み込みの弱さは、聞き取り対象者が大家に偏ったということも影響しているだろう。さらには、当時の農村生活に必要な不可欠であった山林（あるいは入会林野）への着目についても——確かに多少は聞いているものの、官有地払下げ中心で大家の山は使っていないといった情報であった——全体的に踏み込みが浅いといえる。なおこの二つの点は土屋のみならず有賀にも共通する点であり、布施の批判点でもあった。

その他気がつくこととして、土屋ノートは多くの加筆訂正があり、その結果として整理された文章になっている点である。調査終了後に一つの作品にしようという努力が読み取れる。

また、本稿ではその分析を割愛したが、石神以外のほかの名子制度が残存する部落へも土屋は訪問している。このことは、有賀のようなインテンシブな調査方法との違いを意味するものであろうか。しかし土屋自身は「全体的に名子制度を観察して一挙にその本質を明かにしようというやうなものではな」く、「ただ一軒の名子関係だけをできるだけよく調査しよう」と考えた述べている（土屋 1935:12）。すると、インテンシブさが有賀とは異なっていたのだといえよう。

(2) 役役労働論争下の限定的問題意識

ノートでもっとも目を引くことの一つは、初めの方に書かれた報告書の章立てであろう。以下、一部修正の上再掲する（三須田ほか 2011:33）。

岩手県二戸郡荒沢村石神における名子制度

第一章 緒論

一、村勢概観

- 1、位置
- 2、面積広袤
- 3、官民有地反別
- 4、民有地々積細別
- 5、広狭別による土地所有者数
- 6、耕作面積並びに耕作戸数
- 7、戸数及び人口
- 8、職業別による現住戸数
- 9、重要農林産物生産高
- 10、納税

二、村勢の史的考察

- 1、本村の成立
- 2、本村成立当初の人的構成
- 3、経済的変遷——生産、交換、交通上の諸変化——
- 4、貢租関係の変化

第二章 齋藤家名子制度の史的発展

一、齋藤家略歴

- 二、同家産業の史的考察
- 三、同家の本村に於ける地位の史的考察
- 四、同家の他村に対する関係
- 五、同家召使及び名子の変遷
- 六、特に地租改正以後如何なる程度に影響を受け来ったか。

第三章 齋藤家名子制度の現況

一、同家の家族構成

- 二、同家の社会的地位
- 三、同家の産業
- 四、召使及び名子の家族構成

五、召使及び名子の同家に対する関係

- 1、その隷属の程度
- 2、その労務提供の状況
- 3、その生活の實状

六、本制度に関する同家の意思

七、本制度に関する召使及び名子の意思

第四章 結論

- 一、本制度は如何なる意味において封建的か。
- 二、本制度は如何なる程度において非封建的なものにモデルファイされてゐるか。
- 三、本制度は将来も永續すべき可能性を有するか。
- 四、本制度は崩壊に向かいつゝあるか。
- 五、岩手県の名子制度一般との比較——その特徴に関する暫定的考察

「結論」の節題を見てわかるように、土屋の問題意識の背景には、名子制度が封建的なものといえるか否かという、日本資本主義論争における「徭役労働」論争があったことが明白である。上述した「多岐にわたる」聞き取りということと一見矛盾するようにもみえるが、基本的には土屋は、共同調査にあたってこうした限定的な問題意識において関わっていたといえる。それゆえ、そうした問題意識がうかがえる聞き取り事項も散見されるのである。換言すれば、仮説検証的な姿勢を強く持って調査をおこなっていたといつてよいだろう。

しかし当然ながら、ノートの段階ではこの筋書き通りに仕上がってはいない。また、その後このような筋書きでの報告書も作成されなかった。

(3) 漆器業についての情報は不十分

それでは漆器業関係の情報はどうかであろうか。名子らの漆器業への関わり方は一通り聞いており、また、木地と塗物類の価格なども調査しており、くわえて、有賀モノグラフでは指摘されていないあたらしい知見（例：鉄道が開通して炭焼がさかんになると漆器業が衰退し北海道・樺太への出稼ぎも増えていったこと、没落した他部落の家に大家が漆器販売をさせて持ち直させたことなど）もいくつか見られた。しかし残念ながら、われわれが期待していたほどの系統的かつ大量の情報（たとえば年ごとの生産量、販売数・金額、労働力数等）は見られなかった。

3. 小括

3.1 調査の緻密さの相違と「貧困」状況への着目の弱さ

上述からもわかるように、土屋ノートの内容をみると、聞き取り項目がランダムに移行しており、また有賀モノグラフと同一内容の記載も多くみられる。しかし、たしかに

大家・名子の相互給付関係についてはそれなりに詳細に聞いてはいるものの、有賀のモノグラフではそこで書かれたことがさらに分厚く記述されており、有賀の調査の緻密さがあらためてよくわかる。有賀のモノグラフと比較すると土屋の記述が簡素であることは否めない。

このように土屋の農民生活の聞き取りは通り一遍といった感じを否めないが、特にその貧困状況等への目配せという点は弱いといえる。食料自給の割合や病気時の薬のことがなどが簡単に書かれている程度である。その結果、「名子の経済は勿論豊ではない。しかし僕が考へて行つたよりは家も大きいし、乞食のやうな有様では決してない。飢餓線以上にはあるやうだ」（土屋 1935=1937: 66）といった判断になってしまう。これでは、印象での叙述といわれてもしかたないであろう（この点は、大家名子の相互給付関係を重視する有賀でも同様に弱いといえよう）。

そのことは、本稿では詳述しなかった布施からの批判とも関連する。批判論文（布施 1935a、1935b）において布施は、当時の農民生活で重要であった山林、入会地への言及がほとんどみられない点と、それが主として大家に対して聞き取りをしたことに起因するという方法の点に対して批判をおこなうのだが、こうした布施の批判は土屋（と有賀）に対してたしかに妥当しよう⁴。

3.2 問題意識の違いからの共同調査の放棄？

有賀と共同で聞き取りをしたということもあって民俗事象等多岐にわたる聞き取りをおこなっていたとはいえ、土屋の問題意識は日本資本主義論争における徭役労働の性格如何ということに狭く絞られており、共同調査においてもそれが影響していたように思われる。その観点から報告書の章立てでも完成されていたし、聞き取り事項も選択された。そうであるがゆえ、有賀との共同調査を継続せずとも、この数日の調査で必要なデータを得たと土屋は考えたのではないだろうか⁵。

漆器業のデータが十全に集められていないことにも、こうした事情があったのかもしれない。しかし、経済史家であり、この時期服部之聡とのマニファクチュア論争に関わっていた土屋であるのだから、漆器業について興味を抱かないことはないと考えられる。単に漆器業の系統的かつ十全な資料を発見・収集することができなかつただけなのかもしれない。

3.3 問題意識・立場性からの現実把握の相違、共同調査の困難

このように、土屋ノート・論文と有賀モノグラフの比較からは、問題意識にくわえそれぞれの立場、視座構造の違いで、調査の力点や対象者、見えてくるものが違っていたのだということが示唆されよう。そのことから、問題意識と事実認識・理論構築との関連、共同調査の可能性とい

ったことが論点として上がってくる。別稿では、こうした論点を意識しつつ、布施の批判をも素材としながら論じた。

付記

本報告は、科学研究費補助金（林雅秀「森林資源の利用とネットワークダイナミクス」、および矢野晋吾（代表）「日本「農村社会学」の再検討——ポスト「家・村」理論の構築に向けて——」）による研究成果の一部である。

注

- 1) 「名子部落を訪ねて」（土屋 1935=1937）の初出は『帝国大学新聞』の 1935 年 9 月 9 日号、9 月 16 日号、9 月 23 日号に掲載されたものである。『日本資本主義論集』に収録された際に「昭和十一年」の掲載と表示されているがそれは誤りである（土屋 1937: 76）
- 2) 林の着目は漆・漆器研究の観点からであった。
- 3) 土屋ノートは一橋大学附属図書館に所蔵されている。なおこのとき収集したと思われる古文書は東京大学経済学部図書に所蔵されている。
- 4) そのほか、名子に聞き取りをして、その立場による違いを主張した他の論考に、その後法政大学教授、大原社会問題研究所長になる大島清の報告がある。「地頭は、名子の従順を言つて依然その間の関係良好なる事を話してはゐるが、名子自身の語る所は必ずしもそれを裏付けてはゐない」（大島 1937: 39）。「一、二の名子を除いて餘は文字通り悲惨の只中に辛ふじて暮を立てゝゐる。」「加ふるに一般村民の侮蔑も彼等にとつて耐え難い屈辱である。これら全ては、名子地頭間の関係に反映せずにはゐないであろう。たとへそれが表面上の隷従的温順平和のヴェールに覆はれてゐやうとも」（大島 1937: 40）。大島の調査地は宮城県本吉郡大谷村（現登米市）である。大島は、現在名子の係役はなくなっているが、地頭名子間の従属関係は維持されており、一般村民から侮蔑されてもいるとする。関係が良好的・平和的にみえてもそれは表面的なものだとする。くわえて、地主が名子の年貢のみではやっていけず漁業その他の産業団体と関わり高利貸付もなしているであろうことを指摘している（大島 1937: 41）。布施の分析と同様の指摘がうかがえて興味深い。
- 5) ちなみに、土屋は自身の名子制度研究において有賀の賦役論文（有賀 1933、1934）をとりあげていない。その後も有賀の石神研究への言及はおこなっていない。有賀からの研究上の影響を土屋は受けなかったといえるだろう。

文献

- 有賀喜左衛門, 1933, 「名子の賦役（上）——小作料の原義——」『社会経済史学』3(7).
———, 1934, 「名子の賦役（下）——小作料の原義——」『社会経済史学』3(10).
———, 1939, 『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』アチックミュージアム.
———, 1967, 『有賀喜左衛門著作集 III 大家族制度と名子制度』未来社.
大島清, 1937, 「大谷村斎藤家名子制度」『経済学友会報』3, 東北帝国大学経済学友会.
庄司知恵子・林雅秀・高橋正也・三須田善暢, 2011, 土屋喬雄の石神調査ノート(二): アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて」『総合政策』13(1).
高橋正也・三須田善暢・庄司知恵子・林雅秀, 2012, 資料紹介 土屋喬雄の石神調査ノート（四）: アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて——」『総合政策』14(1).
土屋喬雄, 1935=1937, 「名子部落を訪ねて」『日本資本主義史論集』育生社.
———, 1935, 「名子制度について」『先駆』1(4).
———, 1937, 『日本資本主義史論集』育生社.
林雅秀・高橋正也・三須田善暢・庄司知恵子, 2012, 土屋喬雄の石神調査ノート(三): アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて」『総合政策』13(2).
布施辰治, 1935a, 「土屋喬雄氏の「名子部落を訪ねて」を読んで」『経済評論』2(11).
———, 1935b, 「東北奥地の山間部落更生対策と入会問題＝土屋、山川両氏の山村実地踏査誤謬指摘＝」『歴史科学』4(12).
三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也, 2011, 資料紹介 土屋喬雄の石神調査ノート（一）アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて」『八幡平市博物館研究紀要』2.
三須田善暢・林雅秀・高橋正也・庄司知恵子, 2013, 資料紹介 土屋喬雄の石神調査ノート（五）: アチックミュージアムによる石神調査の再考に向けて——」『総合政策』14(2).
三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也, 2014, 石神調査再考: 土屋喬雄の調査ノートを中心として」『日本村落研究学会研究通信』241.
吉川圭太, 2010, 「資料紹介 『東北帝国大学新聞』掲載の布施辰治執筆記事について」『東北大学史料館紀要』5.